平成28年度第３回島田市総合教育会議議事録

日　時	平成28年９月27日(火)午後３時04分～午後４時27分
会　場	島田市役所　第３委員会室
出席者	染谷絹代市長、五條早規子委員長、北島　正委員、牧野高彦委員、秋田美八子委員、濱田和彦教育長
欠席者	
傍聴人	10名
説明のための出席者	畑教育部長、鈴木教育総務課長、池谷学校教育課長、田中戦略推進課長
会期及び会議時間	平成28年９月27日(火)午後３時04分～午後４時27分
議事	(1) 島田市立小学校及び中学校の在り方検討委員会からの提言について

開　　会　　午後３時04分

染谷市長　皆様、こんにちは。定刻を少し過ぎてしまいました。大変申し訳ございませんでした。

ただいまから第３回の総合教育会議を開催いたします。

開催に当たりまして、一言御挨拶を申し上げます。

本日は大変お忙しい中、当会議に御出席いただきまして誠にありがとうございます。

前回の総合教育会議では、島田市立小学校及び中学校の在り方検討委員会の委員長であります、静岡大学の武井先生にお越しいただきまして、今後の島田の小中学校の在り方等について、検討委員会の中間報告という形で、大変参考になる御意見を拝聴することができました。

また、魅力のある教育の一つとしてＩＣＴ教育が挙げられまして、これについては、藤枝市との連携により、国の地方創生推進交付金を活用した、ＩＣＴで人の流れを呼び込むまちづくり推進事業を進めていくという中で、事業のメニューとして、小中学校でのＩＣＴの活用や、ＩＣＴに興味を持った、子供から高校生、そして社会人を含めたエキスパートを養成する講座などを今後検討していきたいという提案を私からさせていただき、教育委員の皆様からも、非常にいい取り組みであるという後押しをいただきました。

この交付金事業につきましては、現在会期中の９月議会において補正予算案を提出しております。御審議をしていただいているところでございます。今後も、この総合教育会議の場を利用して、私からも教育委員の皆様に教育行政についての提案をさせていただきますし、また教育委員の皆様からも、ぜひ、より魅力のある島田の教育の実現のために、御意見、御提案、御要望を頂きたいと思います。

私は、島田の教育委員というのは、それぞれの皆様方がそれぞれのフィールドを持っていらして、そして、それぞれの意見を忌憚なく交換できる、そういった意思の疎通が図れる教育委員会であるということを島

田の教育委員の誇りだと思っております。

私に引き続き、五條教育委員長からも御挨拶をいただきます。どうぞ、五條委員長、よろしくお願いいたします。

五條委員長　皆様、こんにちは。

先週の火曜日に、夏休み明けの最初の学校訪問をいたしました。台風16号が上陸ということで、私も気をもんでいたし、恐らく先生方も心配されていたと思いますが、普段の授業通り、普段の日常と変わりなく、先生方は子供の興味を引く内容で進めていましたし、子供たちも先生方がそういう構えでいましたので、とても落ち着いて、２校行きましたが、どちらの学校とも集中して学習しておりました。

さて、その前の週です。９月16日、島田市立小学校及び中学校の在り方検討委員会から、提言書が提出されました。

提言書の概要については、前回の総合教育会議で武井委員長に説明していただいた通りですが、教育委員会としては、この提案を受けて、今後の島田の教育について考えていかなければなりません。

この提言を読みますと、避けては通れない大きな問題も提起されております。この総合教育会議で、市長と共に、島田の将来を担う子供たちが、どうすることが最善であるかを模索していきたいと思います。どうぞ、よろしくお願いいたします。

染谷市長　よろしくお願いいたします。

まさに教育委員の皆様方と、そして私が同じ方向を向いてこの議論ができること、これが総合教育会議、島田市の会議の大きな特徴といいますか、同じベクトルを合わせて島田の子供たちのためにいろいろな議論を重ねてまいりたいと思っております。

［　議　事　］

染谷市長　それでは、次第に従い、議事に入りたいと思います。

ただいま五條委員長からの御挨拶にもありましたけれども、（１）島田市立小学校及び中学校の在り方検討委員会からの提言についてであります。

こちらについては、前回の総合教育会議で概要の説明がありましたけれども、事務局から何か補足等がありましたら、お願いいたします。

池谷学校教育課長　島田市総合計画後期基本計画６－１に学校教育の充実・施策の方向には、「児童・生徒の減少傾向を踏まえ、今後の教育方法や学校施設のあり方等について検討を進めます」と掲げられています。

人口減少が進む中、平成29年度の計画終了までに今後の方向性を見出すため、平成27年度から島田市立小学校及び中学校の在り方検討委員会を組織しました。

その中で、島田の教育の現状と問題点を認識する、それと共に学校に求められている使命や今後の教育を巡る課題などについて協議を重ねました。

平成27年度に策定された教育大綱では、基本理念「目指す教育の姿」として、「市民総がかりで育む豊かな心と学び」を掲げました。

これからの教育には、学校だけではなく、地域の力が不可欠であると

いう考え方から、島田市立小学校及び中学校の在り方検討委員会においても、「地域総ぐるみで進めましょう　夢育・地育の花咲く　島田の教育」を基本理念とした提言書をまとめさせていただきました。

以上、報告いたします。

染谷市長　ありがとうございます。

ただいま学校教育課長からもお話がありました通り、「地域総ぐるみで進めましょう　夢育・地育の花咲く　島田の教育」ということでキャッチフレーズが提案されまして、教育委員会として、この理念実現に向けて取り組んでいこうということでお話ができたと思います。

この提言書の第３章のところに、「理念実現に向けた手立て」ということで、四つほど提案がされています。これについて、教育委員の皆様方の御意見を拝聴できればと思います。

まず一つ目の、夢育に関する提案はいかがでしょうか。

ここには、『「夢育」の中核的活動として、英語教育や先進科学技術教育・ＩＣＴの活用を通して、世界的な視野を持った市民性を育てていくための教育を充実させること』とございます。これについて、何か御意見があれば、ぜひ。感想でも構いませんので、お聞かせ願えればと思います。いかがですか。

ここに掲げる英語教育や先進科学技術教育というのは、子供たちが夢を育てられる環境を作るということだと私は理解しております。ＩＣＴや英語というのは、その手段であります。そのように考えながら、教育環境を整える中で世界的な視野を持った市民性を育てていこうということが、この夢育のところに書かれている内容だと私は理解しておりますが、皆様から御意見があればお願いをしたいと思います。

牧野委員　「世界的な」という言葉、大好きです。島田市の行政の先駆けといいますと、やはり市民会館。世界の文化をみんなに見てもらう。

それから、アメリカ諸外国との交流ですね。戦後、いち早く島田市が姉妹都市との交流を始めました。その先駆けである島田市が、最初に「世界的な視野を持ち」という言葉を頂いたので非常に感激しております。

それで、三つほどお話しさせてもらいたいと思いますが、第一に、今、お茶をテーマにしておりますので、世界の文化の紹介、それからお茶を広げる日本のこれからの役割等を、せっかくですので、このＩＣＴの手段を使って、例えば学校でいいますと、教室の中で諸外国と話せる。ＩＣＴを使って話して外国の茶園の状況を見るとか、そのようなことはどうかということ。

それから、これもお茶なのですけれども、島田市出身で海外に行って活躍している人物。金谷地区のある製茶会社の息子さんがシアトルでお茶の販売をしているようです。日本に帰られたときに、少し状況を、島田市のこれからの未来のお茶というのはどうなのかという話を聞いて、それをＩＣＴで発信するというのはいかがでしょうか。

それから姉妹都市の交流は、子供たちが夏休み、あるいは休みを利用してお互いに行き来をして交流しているわけですが、それをリアルタイムでＩＣＴで交流するということですね。

それから、国際交流委員会でフレンドシップパーティーを年１回やっていますけれども、ああいう催し物がＩＣＴを使って双方向で現地と交流もできたらいいなと。

それから、こちらにおいでの外国人の方が現地と連絡を取り合って、世界的な視野といいますか、そこで、この言葉が出てくるのですけれども。

それプラス、その次の言葉で、「市民性豊かな子供」というのは、どういう子供かなと考えたのですが、いろいろな場面に進んで参加できる子供ではないかなと。キャンプだよと言えばキャンプへ行くし、ハイキングだよと言えばハイキングに行けるし、ボランティアだよと言えば進んでいけるし、何にでも進んで参加できるというのが市民性豊かな子供ではないかと私は理解したのですが、それは自信を持って海を渡れる子につながっていくと感じますので、今、最初に言いました三つのＩＣＴを使った試みなどはいかがでしょうか。

染谷市長　世界に向けて日本の文化を発信していく、お茶の文化もその要であるというお立場から、ＩＣＴを使って海外の茶園の状況を見たり、あるいは島田出身で世界で活躍している方たちに世界を語ってもらったり、あるいは姉妹都市の交流のある、そういった地域とリアルタイムでＩＣＴの交流ができないかと。

実際、姉妹都市ともできますし、今、インドネシアからも島田の学校に、インドネシアの子供たちの様子や暮らしを紹介する人たちが毎年来てくれていますよね。

濱田教育長　はい。

染谷市長　あの方たちとも、もしかしたら、そういった交流は可能かもしれませんね。いかがですか。

濱田教育長　ことしもインドネシアから、確か３名の大学生が島田の学校を３校訪問して、その中でいろいろな情報の提供とか、プレゼンテーションをしてくれて、インドネシアへの理解を深めるようなことをやってくれる予定になっています。

日程については、詳しくは学校教育課長から聞いていただきたいと思いますが、ことしも、そういうような計画を進めているところです。

染谷市長　そうですね。来てくださる大学生たちが大変日本語も堪能で、日本文化を深く学んでから来てくださるものですから、うちの子供たちの素朴な疑問にも率直に答えていただいて、良い交流ができていますので、そういうことも一つ、これから発展できるきっかけ作りにはなるかなと思いながらお話を伺いました。やろうと思えば、これはできないことではないと思いますし、海外と島田市だけではなくて、日本国内の他市の状況、お茶でつながるところもたくさんあるでしょうし、いろいろな、山あいの学校でありましたり、海辺の学校でありましたり、震災を経験したところの学校でありましたり、こういったところと子供たち同士がＩＣＴでリアルタイムで交流ができるということは、これから実現可能なことの一歩かなと思いました。

いかがでしょうか。他に御意見がございましたら、お聞かせください。

濱田教育長　牧野委員の今の発言は大変すばらしい内容を含んでいるなと思いました。一つは、市民性のところで、何でも挑戦するということについては、まさにその通りだと思います。島田市の教育委員会が今、力を入れている心の教育の中にも、強い心、挑戦する勇気とか継続する意志の強さのようなことをうたわせてもらっていますが、まさにその部分と通じることだと思います。今後の新しい制度、特にＡＩの普及に伴って、いろいろな仕事が新しく出てくる。または、今までの仕事が無くなっていく時代を考えますと、今までの既存の考え方だけではやっていけない時代が来ると思うのですね。そのときに一番大事なのは、挑戦する勇気のようなものが大事なものですから、そこは、この夢育の中で一番の核にしていかなければならないことだと思いました。

一方で、ＩＣＴの活用については若干課題もあると思っています。それは時差の問題です。アメリカとやるとき、要するに昼夜が逆転するわけですね。こちらでリアルタイムを臨むときに、向こうがどういう時間帯なのか、若干リアルタイムでやるということについては、外国をどこにするかを検討しなければならない要素があるかなと思います。外国とリアルタイムに交流することについては、大変魅力的ですし、子供たちの視野を広げるという意味では重要だと思いますが、リアルタイムというところに限りますと、時差は大きな問題、課題になってくるかなと思っています。

染谷市長　そうですね。その点、台湾は１時間、インドネシアは２時間でありますので、まずはアジアのところからと思います。

北島委員　時差のことなど余り気にする必要はなくて、無いところでやればいい。韓国はゼロですよね。シンガポールでも１時間。案外オーストラリアも、そうだと思います。

染谷市長　そうですね。オーストラリアも２時間。

北島委員　アメリカが何も、その代表ではありませんから。アジアでまずはよろしいのではないかと思います。

五條委員長　今、牧野委員から夏休みの姉妹都市での交流という話が少しあったのですが、その夏休みという期間だけではなく、人材育成のために市や企業が協力して投資をし合ったりして、留学という形で外国語を習得して、また帰ってきたら市で活躍してもらうということも可能かなと、私も一番の世界的な視野でということを読みまして、ふと頭に描きました。

染谷市長　そうですね。民間の投資も必要ですよね。行政が全てをやるという発想だけではなくてね、これからは。

分かりました。ありがとうございます。他にはよろしいですか。

もしよろしければ、２番目の地育に関して御提案を求めたいと思います。

２番目の地育は、『「地育」の中核的活動として、就学前から学齢期に至るまでの成長プロセスを通して、地域の特色・魅力作りに関係していくための主体的活動を導入し、学校、家庭、地域、それぞれの役割を明確化し、これを足がかりに子どもの成長環境の改善を図ること』となっております。

御意見ございましたら、お願いいたします。

この地育というところでは、地域の主体性というようなもの、地域が主体性を持って教育に参加して、学校と協働して共に教育を支えていく仕組みを作るというところがここに掛かってくると思います。今回の御提言も、実はぱっと読むと、随分と地域の力について、これからの大きな方向性が示されていると私は感じております。地域の文化や伝統を継続する、そういったことも地域が主体性を持って教育機能を分担していこうということであったり、家庭教育自体も地域全体で支える仕組みを作ろうということであったり、これまでも島田の学校というのは地域の方々に大きく支えられる学校でありましたけれども、支えるだけではなくて、参画して、まさに教育環境を作っていくところまで地域の力を生かしていこうという提言になっていると思います。

この地育の活動のところで、何か御提案がございましたら、あるいは御意見がございましたら、お聞かせください。いかがでしょうか。

地域という言葉には、何となく他人ごとに聞こえるようなぼんやりした意味合いもあるのではないかと、前にここで議論したときには、そういう御意見も確かあったように覚えております。地域の教育力がどれだけあるかによって学校の教育も変わってくるという話にもなってまいります。ですから、この地域がどう関わっていただくかという地育のところに関しては大きなウエートを占めていくのかなと思っていますので、よろしくお願いいたします。

北島委員　そうなのですね。島田でも人口が過疎になっている地域、それほどでもない地域、本当にさまざまあるのですが、これは多分、その次の３番目のコミュニティ・スクールと関係が、どうしても密接に出てくるのではないかと思うのです。やはり人間がずっと生きてきて、どこで三つ子の魂を一番育めるのかというと、これはまさに家庭と地域なわけですね。決して学校ではないわけですが。しかし、その延長線に学校があるわけです。そこの力が無くなると、人は一遍にいなくなってしまうと思います。増田さんでしたかね、自治体が消滅するという衝撃的な著書を出されていますが、ああいったことは果たして良かったのか、出してしまうと、人がかえって寄ってこなくなる。逃げ出していくのではないか。学校も結局、その地域との密接な関係があって、これは生まれてからずっと、学校の時代ももちろん、そこから後も、何らかの教育と文化というものに人は関わって生きざるを得ないわけですから、そういう意味では、その地域に実際に住んでいる人たちが、例えば学校の文化、学校が無くなれば、その文化を担う人が無くなる。そして、人もいなくなる。若い人は、そういったところへもう住みたくないとなると、まさに増田さんのおっしゃったようなことが加速度的に進んでいってしまうのではないかと思うのですね。地域が崩壊すると思います。それと共に、文化も消滅します。結局、文化というのは何なのだというと、人がずっと先祖代々そこで命をつなぎながら生きてきた生き様といいますか、そういうものそのものが文化の本質ですよね。そういったものが結局失われてしまうということでして、何でもないことのようなのですが、やはりその魅力

を学校でも拾い上げていただいて、そしてまた自ら学校を動かす、そういう地域の力が本来あるべきだと思うし、それが無かったら、その地域は消滅して当たり前かもしれません。消滅させるなというのであれば、やはり教育に地域の力を持ってきていただかないと、本当の意味のインフラとしての学校教育は成り立たないのではないかと思うのですね。そういう意味では、３番目のところで出てくるコミュニティ・スクールという考え方につながっていくものではないかと思います。大事なことだと僕は思いました。

染谷市長　そうですね。地域が消滅してしまえば文化も全て消えてしまうというお話、消滅可能性都市ということで、２年半ほど前に日本創成会議の増田レポートといわれるもので発表された内容だと思います。

あの中には、静岡県内11の市町が消滅可能性都市として載っていたのですね。そのうちのナンバーワンになったのが、我がまちの北の町です。ここがそのトップに上がっていて、あとの10地域は、ほぼ伊豆半島に集中しておりました。こういった課題、実際、東京一極集中をなくして地方に人の流れを作ろうと言いながら、地方創生は２年目にしてますます東京集中を加速化させているという現実もあります。そうした中で地域が果たす役割というものについて、10万人都市の島田だからこそできることは確かにあると私は思うのですね。

北島委員　さらに言うなら、そういうことを大事にしなければ、先ほど言った１の中で、「世界的な視野を持ち、市民性豊かな」、ここへつながっていかないのですね。ローカルなところだけでということはあり得ないわけでして、それがあるから世界に出せる自信ができるのであると考えざるを得ないので、地域が無くて、世界的な視野を頭の中だけで作り上げても、そんなのは何にもならないと思います。やはり両方がバランス良くないと、そういう要素が無いとだめではないかと思うのですね。

染谷市長　そうですね。皆さんよろしいですか、少し話をさせていただいて。

人間の根っこを作るのは地域だと思うのですね。その根っこがないと、幾ら国際人になっても、上辺だけの国際人というのか、世界中で活躍しても、根っこが無い人は、やはり認めていただけないのですね。よその国の若者を見たときに、ものすごく熱い言葉で、気持ちで、我がまちの、我がふるさとの自慢をするのです。でも、日本の子供たちは、なかなか自分のふるさとの自慢ができないというのが、実は世界に出て、私がいつも感じるところであります。我がまち、ふるさと、島田を誇りとして世界で活躍できるような人を作るためには、地域という根っこが必要なんだと強く思うところです。この根っこを、地域の力をどう作るかということが、これからの大きな課題なのですが、何かそのヒントになるような御意見があったら聞かせていただきたいと思います。いかがでしょう。

五條委員長　ヒントというと、そうではないのかもしれないのですが、地域の力を発揮することを島田の中の各地域というように考えると、地域に委ねてしまうだけではいけない。先日の島田市立小学校及び中学校の在り方検討委員会の提言書を頂いたときに、検討委員会の委員の方が、自分は地

域住民として、ずっと自分の地域のことだけを考えていたのだけれども、この検討委員会に出席することによって、他の地域の人たちや、他の立場の人たちの考えをいっぱい聞いて、それを自分の地域へ、また戻って伝えて。そうすると、自分の地域の人たちも、そういう考えもあるのかと、新たに考えを受け入れてくれることもありましたと話してくださったのですが、本当にその通りだなと。地域の中での話し合いにとどまらずに、他地域の人たちと交流することによって柔軟な考え方が生まれてきて、また自分の地域を大事にする、自分の地域のことをより良い方向へ考えるということになるのかなと、とてもそのときの委員の方のお話で思いました。

北島委員　地域に関して言うと、地域単位でということになると、みんな水で薄められて何のことを言っているのか分からなくなります。そういうことで、もう一歩進んで言うならば、例えば具体的な、この土地にずっと続いてきた芸能とか昔話でもいいです。特別な昔話があるとか、芸能で言いますと、例えば神楽があったり、太鼓だったり、祭りだったり、何か特別な行事であったり、習慣だったり、そういうことでもいいと思うのですね。些細なことのようでも、意外と、少し別の地域に行くと、とても珍しい。あるいは、とても深いものがあるということが結構あると思います。そこに関わってきた人を地域にしてしまうと、みんな行政単位で、何とか地区のというような形になってしまうと、全部薄まってしまって何なのかさっぱり、隣町も同じではないかということになって、逆に言うと、隣を見て自分のところもそれに合わせようということになってしまいがちです、日本の社会。それだと、結局いつまでたっても進まないのではないかと思います。そういう意味では、この「地域に根ざして」というのは、地域に伝わってきた文化的な要素、それに根ざしてという具合に考えたほうが進めやすいのではないかと思いました。

濱田教育長　地域の使い方って、とても難しいと思います。例えば私が以前にいた笹間には笹間神楽がありますが、笹間神楽は笹間地区のものなのか、それとも島田の財産とするのかというところは、やはり考えていかなければならないのではないかと思います。ですから、太鼓は例えば金谷のものであり、相賀のものでありという、その地区限定のものにするのか、それとももう少し広く、島田の財産として考えていくのか。六合には猿舞がありますが、あれは六合の東光寺の文化であり伝統なのか、それとも島田の財産とするのかという視点は、やはり、もう１回考え直さなければならないのではないかと思います。限定的な地域という考え方だけで行きますと、こういう文化とか伝統とか、すばらしいものが、それこそ消滅していく可能性があるのではないか。やはり視点をもう少し、島田市という広い視点での地域を考えて、その財産としていくということも一方で考えていかないと、やはり、この在り方検討委員会の中で出たことは、地域の文化とかを、または地域のある学校が消滅する、例えば統合とかになったときに、そういうところを市全体で地域の文化とかを守っていこうという話は、かなり強く出されているものですから、やはり地域の文化というのは、本当に狭い地区の文化だけにするのではなく

て、島田市全体がそれを支える、島田市の文化とするという視点も持っていかないと、島田の魅力が失われることになるのではないかと思います。

少し話が長くなりますが、氷見市の子供たちが島田に来ていろいろな交流をしました。そのときに、ＳＬに乗ること、トーマスに乗ること、ヤマメのつかみ取り、いろいろなことがあったのですが、一番楽しいと手を挙げたのは、家山川での川遊びです。これはなぜかというと、氷見市は、海水浴はできるけれども、川遊びをする場所が無いのだそうです。ですから、向こうの子供たちにとっては大変新鮮な感動を覚えて、それが一番に楽しいという発言になっているわけですね。でも、地域の子供たちが、あれを本当に島田の財産として思っているかというと、若干弱い部分があると思うのですね。ですから、よそから見た島田の魅力ということも、きちんと価値づけていかなければならないし、先ほど言ったように、地域にあるもの、本当に小さい地域でやっていることもきちんと価値づけて、もう少し広げていくという作業も、これからの教育の中には求められるのではないかと考えています。

牧野委員　先日９月18日に髷祭りが行われました。私どもが参画したころ、25年ぐらい前には、美容師さんにお願いをして、かつらでいいから何とかやってくれないかという時代がありました。

ことしは81名の方が自主参加で全国から集まっていただいて、なんと子供たちの多いこと。非常に大勢のジュニアが来ています。

関わった美容室が島田市内で22美容室ですかね。数字は定かでありませんが。そういったことで、地域限定ではなくて、島田市全体での魅力といいますか、そういった祭りになりつつあると。いろいろなしがらみもあるでしょうけれども、私がその祭りで時間を待っている間に、よその市の老夫婦といいますか、私より15歳ぐらい上の老夫婦の方がおいでで、一緒に写真を髷娘と撮って、いやあ、これはいい一生の思い出になったよと言って帰ってくれました。

そういった誇りのある髷祭りなのですが、なぜ子供たちがついてきたかというと、やはり親のリードがあることと、誰でも写真が撮れる。先ほどのＩＣＴではないけれども、スマートフォンできれいに撮れるものですから、全国から来ていて、成功した地域の文化の継承ではないかと思っています。ですから、親がリードできるもの、「子供何々」というのができるものは割と継承しやすいと思いますけれども、いわれが何だかよく分からない、それから、先ほどの価値観が狭いものというのは、なかなか伝承が難しいですよね。そうすると、やはり、ある部分では学校単位で拾い上げることも必要になってくるかなと、今、少し思いました。

染谷市長　そうですね。私も昨日、髷祭りに毎年浅草から参加してくださっている方に、東京で少し時間を見つけて御挨拶に行ってまいりました。そうしましたら、ことしの髷祭りは、三味線。小さな娘さんたちが日本髪を結って、浴衣であの三味線を披露してくださった。すごいですねと。毎年進化していますねというお言葉をいただきました。外部の方から見ると、内側からは反省点もたくさんあったのですけれども、でも、そうや

って認めていただいて、これから髷祭りがどのように進化していくのか楽しみですというお言葉もいただきました。外から価値づけていただくことで、島田市民がまたそれを、自分たちの持っているものを再認識して誇りに育てていくということも実際にあるかなと思っています。

もう一つは、もうすぐ島田大祭が始まります。でも、この島田大祭、人手が足りないといいますか、若い人たちが減ってしまって伝承が大変難しいということが言われ始めています。こうした中で、小学校への出前講座で島田大祭の内容を伝えていく、参加したいと思わせるような動機付けを小さな子供たちのうちからしていくという、時間の掛かることも始まっているのですね。こういったことも、まさに地育の中の一つなのかなと思います。

秋田委員　今、地域の話がたくさん出たのですけれども、私はずっと子育て支援に関わってきまして、この文章の中で、「地域・家庭・学校それぞれの役割を明確化し」というところがあるのですけれども、その文章を見たときに、家庭との関わりの難しさ、地域と家庭がどう関わっていくのか、学校と家庭がどう関わっていくのか、そこがすごくネックになってくるのではないかと感じました。

私自身、まだ小学生の子供がいるのですけれども、小学１年生の保護者の方と話をすると、５年前とは全く環境が変わっています。そういう中で、ありきたりの、家庭はこうあるべきという役割を押し付けても、なかなか難しいところがある。そういったことを考えたときに、地域が家庭を支えていく、でも、地域はここをやる、家庭にはここをお願いしていく、そこをはっきりさせていかないと、なかなか難しいところがあるのかな。

やはり普段子育て支援に関わっている中で感じるのは、子供が小さいうちから仕事に出られるお母さんが増えてきているので、子育てに関して、少し上のお母さんや地域の人と関わって、そこから何か教わったりという経験の少なさ。なので、知らないことが多い。経験していないことが多いということが話をしていくと本当に感じますので、そういったことも前提にした上で、でも、どう各家庭とコミュニケーションをとっていくとか、やはり、そこは大きな課題になっていくのかなと感じました。

染谷市長　そうですね。自分の子供より少し大きいママを見ると、やはりどうやって叱っているのか、おもちゃの取り合いのけんかをしたら、どうやってそれを仲裁しているのかとか、見ながら覚える、少し先行く先輩から教わることがたくさん子育ての中にはあるのですよね。そういったことは教育委員会だけではなくて、こども未来部も親育ということでは大分力を入れています。そういった連携も今後、大変重要なものかなと私自身認識しております。

よろしいでしょうか。

それでは、次の３番目のところで、今後、「学校教育に課せられることが予想される課題等への対応」ということで、アクティブ・ラーニングや市民性の教育、コミュニティ・スクール、それから社会に開かれた教

育課程、チーム学校ということで、ここに御提案がありまして、「これらの課題を有機的に関係づけ、核を形成して集約的に対応していくこと」と書かれております。この三つ目の課題につきましては、今後、学校教育に課せられることが予想される課題等への対応ということで、御意見があればお聞かせ願いたいと思います。いかがでしょうか。

市民性の教育というのは、シチズンシップということだと思います。コミュニティ・スクールについては、先ほど北島委員から御意見がございましたが、プラスしてお話しいただけることがありましたら、お願いをしたいと思います。

前回のときには、教育長から、体験活動重視といっても、やはりやりっぱなしの体験活動では子供の力にならないということで、学校が教材としてそれを意味付けていくこと、それから活動の主体が地域にあること、こういったことをお話しいただいたと思うのですね。ですから、地域が関わって子供に体験活動といっても、それはやりっぱなしではない、その後のフォローが学校や地域との連携の中で必要だということをお話しいただいて、アクティブ・ラーニングのお話やコミュニティ・スクールに係るお話をしていただいたと思うのですが。いかがでしょうか。よろしいですか。

今、チーム学校としての課題、あるいはそれぞれの学校の取り組み状況などは、どうなのでしょうか。もし何かお話があれば。チーム学校という形で、島田はそれぞれの学校があらゆる課題に対してチームで対応するということをやっていただいていると思うのですが、進捗の状況であったり、あるいは何か課題がそこにあるかとか、もし御意見があれば、事務局からお話を。

池谷学校教育課長　チーム学校ということは、文部科学省が盛んに提唱している言葉ですけども、島田市においては、特に生徒指導の面におきまして、スクールソーシャルワーカーを静岡県で一番早く市の単費で導入してくださったということで、ソーシャルワーカーを軸にして、関係各課と学校と、そして保護者、地域、それがケース会議という手段を基に、さまざまな手法、アセスメントとプランニングを重ねて、大きな成果を上げております。生徒指導において、この近隣３市の中でも、半分または３分の１の問題行動の数、不登校の数の少なさというものが大きく生きた事例ではないかと思っています。

また、先ほど地域の行事等への参加に関しても、小規模校が大変多いために、学校の行事も地域と非常に密接している地域だなと思っております。地域の教育力を取り込むという姿勢は、まだまだこれから課題もありますけれども、島田市は、そういう素材が大変ある地域という認識を持っています。

染谷市長　ありがとうございます。今、学校教育課長から、チーム学校ということの取り組みでは、志太の３市の中でもトップクラス、そしてスクールソーシャルワーカー等の活用によって、問題行動件数や不登校人数等も他市に比べて３分の１ほどだというお話もいただきました。なかなか難しいところと思いますけれども、もし御意見があれば、プラスしてお聞

かせ願えればと思います。よろしいですか。

牧野委員　この次の４番にも関係するかもしれませんが、私ども民間サイドで学校へ訪問していろいろな教室をやらせてもらっていますが、この間の会議から非常に考えさせられました。

先生方にアポイントを取って、いつ学校にお邪魔して、これを準備してやらせていただきたいとお願いに行くと、それだけでも、説明するのに少なくとも20分は掛かります。それに応対していただける学校の先生が、その学年の、例えば３人、４人の先生が対応すると、１時間ぐらいの延べ時間をとってしまうことになる。学校の先生方には何もやってもらわなくて、全部出前で持っていって教室をやるよという話をしても、多少の打ち合わせをするだけでも時間をとられてしまうので、それもつらいと言われると、地域が学校に対して分担、あるいは連携をしていきたいと言っても、今の状況では非常に難しいと私は感じています。ですから、４番にも関係しますけれども、専門家のグループといいますか、学校ごとになるか、初倉地区とかの単位になるかもしれませんが、学校の代表の方、校長先生か地域担当者が学校にいて、それと地域の代表、あるいは我々のような民間の代表者、そういったものとの連携をするグループが欲しいなと思います。

染谷市長　地域担当のコーディネーターのような方が学校にいて、そういった地域活動や地域が関わるものについて、その方が専門にコーディネートをしてくれて、先生方の負担を軽減していくという考え方でしょうか。

牧野委員　はい。試行的でもいいと思います。地域限定でもいいと思いますが、そういったことがあると、我々もそこへ行って相談をすればいいかなと。そうすれば、あしたの授業の内容を一生懸命検討している先生を呼び出して打ち合わせをするというのは本当に忍びがたいので、そういったワンクッション、ある部門がいていただけると、そういう分担、それからお願いも前に進むかなという気がしますので。いかがでしょうか。

濱田教育長　全国的にも先進的な事例、特にコミュニティ・スクールがうまくいっているところは、地域コーディネーターのようなものを持っているところがうまくいっているかなと思います。私がいろいろ資料提供をお願いした福島県の伊達市は、まさにコーディネーターがすばらしい人材としているものですから、コミュニティ・スクールがうまく回っているという話を聞いています。そういう意味では、地域と学校をつなぐコーディネーター役がいることが、地域人材の活用、または地域資源の活用にもつながるし、場合によってはコミュニティ・スクールなどの運営にも大きな影響が出てくるかなと思います。けれども、これは予算の掛かることですから、この辺は少し、それなりの予算立てをしていかなければいけないことかなと思っています。

今、島田第二中学校区では、コーディネーターがいる学校支援地域本部をやっているものですから、ああいうような形の方がいると、学校支援だけではなくて、コミュニティ・カフェのような、地域の方々へのサービスも同時にできる、両方向のメリットのある活動にも発展する可能性があると考えています。ここのところは、今後検討していかなければ

ならない課題の一つだと思っています。

染谷市長　今、島田第二中学校区でやっている学校支援地域本部ですか、これは拡大していく計画があるのですか。

濱田教育長　社会教育課に検討させているところです。

染谷市長　ありがとうございます。

北島委員　この３番の項目は、前にも定例会のときでしたかね、少し見せていただいて、非常に大きな問題というか、課題があるなと思っていたのですが、まるで我々が象を触っている盲人と同じで、アクティブ・ラーニングって何年か前から何となく聞いていて、自分なりには少しずつイメージは作ってきているのですが、でも、それでいいのかというと、よく分からないですね。社会に開かれた教育課程ということになると、これはコミュニティ・スクールと関係がありそうなのですが、同じかどうか、一緒くたでもいいのか、別の項目として取り組まねばならないのか。カリキュラム・マネジメントとなると、むしろ現場の学校の先生のところでの主な取り組みかなと思います。チーム学校もそうですね。小中一貫教育となると、これはまた全然違う。「個別に対応していくのではなくて、有機的に関係づけ」というところ、このあたりを考えますと、盲人の我々がしっぽを触ったり、鼻を触ったり、足を触ったりして、ただ想像を膨らませて、象ってこんなものかと、こう思っているだけでうまくいくのでしょうか。ここのところはもっと次元の違う取り組みをしないと、僕はいけないのではないかと思います。

たまたまですが、ひと月ぐらい前に中学校のクラス会がありまして、そこで卒業以来、何十年ぶりに会った男がいまして、名刺を交換したら、国立大学法人兵庫教育大学先導研究推進機構教育政策トップリーダー養成カリキュラム研究開発室という、その特任教授をやっている堀内という男がいまして、教育委員をやっているんだったら、それなりの人にきちんとこの名刺を見せて、市なり教育委員会の誰か、政策に深く関わるような人をよこしてくれたらしっかり教育してあげるよというような話もあったのですが、今、これを見て、この３番のところの、例えばこういうところに人を派遣して、教育政策をもっと根本的に次元の違うところから組み立てていかなくてはいけないのではないかなと。ただ、よその施設を見ながら、うまくいっているようだからまねしようかということでは済まないのではないかと。せっかく染谷市長の気合いが入った総合教育会議でこれに取り組もうということになりますと、そのぐらいの予算が掛かっても、まずはそういう人材を育てるところから始めたほうが良いのではないかというのが、私の思っている感覚です。

染谷市長　私も人材育成ということには大分力を入れておりまして、市長になってから最初に派遣した人たちが、３年勉強したら、やっと来年の春なのですね。来年の春に帰ってくるのが三、四人いますか。やはり期待しています。人を育てるのは時間が掛かるけれども、でも、この先、10年、20年を思えば、とても大事なことだと思っていますので、またその話も教育委員会の中で詰めていただければと思います。

さて、そろそろ次の課題に行きたいと思います。次は最後になります

が、学校配置の適正化ということについて、皆様の御意見を伺いたいと思います。

「児童生徒の教育環境確保の観点から学校再編を検討し、学校建築の工夫も含めて学校配置の最適化を模索すると同時に、当該地域の文化・伝統の維持や地域活性化を図っていくこと」とございます。前回、武井先生に来ていただいたとき、このお話のところで、武井先生から、複式学級が頻繁であれば再編の対象となるのではないかという一言もございました。

この学校配置の最適化について御意見がある方、いらっしゃったらお話を聞かせてください。お願いいたします。

確か、これも前回のときに教育長から、規模だけで考えることではないと。離島であれば、たとえ２人でも３人でも学校は必要なんだというようなお話をいただいたと記憶しております。

北島委員　今、おっしゃいましたその意見に私も非常に賛同したいところです。行政の側からといいますか、やはり規模だけで、やりやすい教育をする、学力を付けるということ、そういう観点だけで見ると、安易に統廃合していいのではないかということに結局なるのかもしれませんが、そうではなくて、やはり最初のところに係わっておりまして、この２番の「地域に根ざして」というところで、まさにその地域が存続するために学校が逆に必要であると。学校が無くなれば地域があっという間に無くなってしまう。まちなかでそういう実感が余り持てないかもしれませんが、割合、人口の少ない地域に行きますと、ひしひしとそういう感じがするのですよね。最後のとりで、頼りなのです。ここで暮らすため、ある意味、頼りになる場所なのですね。それでも、ある線を越えてしまうと、もうそれも言ってはいられないところが出てくるかもしれませんが、でも、そこへ行く間は、あらゆる努力をしないといけないのではないか。文化は消えます。

先ほど教育長から、島田として全体でその文化とありました。どの文化も島田の文化というように考えればいい。それは、そうです。でも、頭の中ではそうなのですが、腑に落ちるかというと、本当に腹の中の深いところで納得できるかというと、やはりそこに深く関わった人でないと、そういうことが実際に体現できないと思います。本通の子がどれほど教育をうまくやったとしても、笹間の神楽について説明できるでしょうか。本当にいいものだと心から思って説明できるでしょうか。無理だろうと思います。

染谷市長　この件について、他に御意見ある方、いらっしゃいますか。

今、北島委員からは、規模だけで考えてはならないということに賛同だという中で、地域が存続するために学校は必要であると。最後のとりで、頼りになるのが学校だというお話をいただきました。

他方、私もいわゆる財政の問題で、行財政改革として学校の統廃合を考えてはならないということにおいては、北島委員と同じ意見を持っています。ただ一方で、例えば北部の４校、伊久美、神座、相賀、伊太、この４校の学校分で去年産まれた赤ちゃんは全部で16人です。

濱田教育長　済みません、18人。

染谷市長　いや、２人越してきて18人になったのです。生まれたのは16人だったのです。２人越してきて、今、18人になりました。でも、４校分です。そういうことが、もしこれからも続いていくとしたら、子供がふさわしい教育環境の中で育つには、それなりの規模もやはり必要です。一緒にサッカーができるとか、一緒に合唱団ができるとか、いろいろな考え方の違うお友達と切磋琢磨できる、多様性を身に付ける環境ということも必要でしょう。そうすると、少ない人数で６年間ずっと一緒でいいのかという課題も、ふさわしい教育環境として課題が出てくるんだと思うのですね。ですから、子供にとってふさわしい教育環境、私どもが子供たちの教育環境として与えたい教育環境ということと、地域が存続するための学校というのは、ある意味、相反する価値観なのですよね。これをどこで折り合いをつけていくのかということが、これからの大きな課題になってくるのですね。

北島委員　本当に、そうだと思います。私もそのように言いましたけれども、半面はその通りでありまして、だから簡単に行かない話なのですけれども。また思い出したら言います。

染谷市長　他に御意見のある方、いらっしゃいますか。

五條委員長　私も小規模校というのは、人数がどんどん減っていくという現状は、この資料で分かりました。少ない人数の学級で子供を育てていく難しさ、今、市長がおっしゃったように、その通りだと思っています。

ただ、小規模校の地域の方にこの前お話を伺ったときに、地域で学校と家庭の間に寄り道という形で子供の居場所を作っているよと。学校が終わるとそこに寄って宿題をやったり、遊んだりして。ただし、保護者とはルールを作って、お迎えは保護者という形で。本当に地域と家庭が分かり合って、信頼し合ってやっているんだな、その地域だからこそできる取り組みだなと思いました。

濱田教育長　私は笹間中学校にいるときに学校統合を経験したのですが、２年ほどかけて地域の皆様方と一緒に話し合ってきて統合という結論を出したのですが、やはり地域からは残して欲しいという意見もありました。最後の決め手になった発言は、ＰＴＡの方が、これだけ子供たちが減った理由を考えて欲しいという発言があったわけですね。それは、地域の方々が、まさに残して欲しいという方々のお子さん、要するに子育て世代の人たちが、みんな島田とか藤枝、下におりているのではないか。もっと言うと、自分の子供は外へ出しておいて、学校だけ残せ、今残っている人だけ、少し言葉が悪いかもしれませんが、今残っている子供たちだけに頑張れというのはおかしいのではないかという発言があったのですね。もし地域の皆さん方が自分の子供をきちんと地元で育て、孫を育ててという環境ができていれば、そういうことをきちんとしていれば、これほど苦しい状況にはならなかったという話をしたわけですね。ですから、私は地域の方々がそういう意識を持って、学校を残すためには、自分の子供、自分の孫は地域で育てるという決意のようなものがないと、

その間にあった子供たちが本当に望ましい教育を受けられるかと、少し心配になりますね。

例えば修学旅行に行くときに、男の子、女の子、一人一人で修学旅行に行って、どうやって泊まるのかと話題になったことがあります。多分、それぞれ先生方、１人は女の養護教諭と泊まる、１人は担任と泊まるというような形で、先生と相部屋でしか泊まれないね、それで本当にいいのかな。大きな学校だったら、場合によっては、まくら投げをやったりして楽しむ修学旅行が、本当に限定的な楽しさでしかない、これで本当にいいのかということをこのごろ話題にしたことがあるのですが、そういう意味で、地域の文化を守るという視点は当然大事だと思います。でも一方で、子供の教育の充実という視点は、私、教育に携わる者としては外せない部分だと思うのですね。そこをどう両立させるかというのは課題だと思っています。

北島委員　先ほど、ふと言い忘れたことを思い出したのですが、今の話と非常に関係が。

結局、地域との関係なのですよね。ですから、また話を戻します、コミュニティ・スクールです。これは地域の人たちが主体的に学校の運営に関わってきますよね。まさにそういった考え方がそこに強く反映されてきますから、これだけ人数が少なくなりますと、本当に心配であるという地域の人たちの気持ちが表に出てきたら、コミュニティ・スクールそのものが成立し得ないのではないかと私は思っているのです。そうしてみると、まさに統廃合のような配置の見直しをしないといけない時期が来るのではないかと。その辺が問題ではないかと思うのです。そうすると、逆にこのコミュニティ・スクールを早く進めることによって、今、おっしゃったような、地域の考え方、地域のパワー、決意のようなもの、こういったものは、もっとダイレクトに学校そのものに反映されてくるであろう。そのときが、まさにその時期ではないかと思うのです。ピンポイントでそうなるかどうかは分かりませんが。

やはり３番目のコミュニティ・スクール、一体のものが、そこで初めて地域の意思というもの、意図というものが反映されるのではないかと思うのですね。そうだったら、最後のとりでは無くなった。つまりは、自治体そのもの、地域そのものが消滅するということを覚悟するんだ、ということだろうと思います。

染谷市長　島田市も以前、コミュニティ・スクールを試行的にやったことがありますね、確か３年。そのときに、かなり課題が噴出しまして、その後、島田市としては、コミュニティ・スクールは試行で終わったと。その次の一歩が踏み出せなかったという事情がございました。

当時は人事権までコミュニティが持つというコミュニティ・スクールでありましたので、今、国の考え方も、また変わってきておりますが、コミュニティ・スクールのメリット、デメリットについて、少し教育長からお話をいただけますか。

濱田教育長　最初、島田市が試行したころ、確か平成19年頃から平成21年頃までと

思うのですが、このときは、かなり先鋭的なコミュニティ・スクールだったと思います。そのために、コミュニティ委員の方々が、かなり学校運営とか、さまざまなことに強い発言力を持っていました。そのために、校長の学校経営とコミュニティの皆さんの考え方に相違が生まれて、なかなか壁というのか、差が埋められなくて困ったと。それが一番大きな問題だったと思います。でも、文部科学省も、今、市長が言った人事権とか、時には財政的な面まで含めた権限を与えるのではなくて、もう少し緩やかな、学校支援地域本部を大きくしたような、または学校評議員をもう少し充実させたような形のコミュニティ・スクールも視野に入れたという、柔軟な対応を見せ始めています。

先ほど言った伊達市の例も、どちらかというと柔軟な形のコミュニティ・スクールです。静岡県も、しずおか型コミュニティ・スクールとして、若干、文部科学省が最初に言っていたコミュニティ・スクールよりも柔軟な組織作りをと言っているものですから、今後やっていくのだったら、そういうような少し柔軟な形のコミュニティ・スクールを模索していく必要があるのではないかと思います。ですから、以前と大分環境が変わってきているものですから、コミュニティ・スクールも、今後取り組んでいく環境がだんだん整いつつあるかなと思っています。

染谷市長　そうですね。校長が体を悪くするぐらい、いろいろな課題がその当時起こりまして、まさに先鋭的な取り組みだったのですが、課題が多岐にわたり、その収拾にも大変苦労をして次の一歩が踏み出せなかったという過去の試行があるものですから、今後コミュニティ・スクールをやるのであれば、島田としては慎重に柔軟な形で、どのように始められるかというところは検討していかなければならないと思っています。

それから、先ほどの教育の充実ということと、地域が存続するための学校ということについてですが、島田でも、ある地域、例えば複式学級をやっている地域では、お子さんが小学校に上がる年になると、若い世代が大きな学校区に移ってしまう、アパートを借りて移ってしまうということも現実に起こっていて、小規模校の特色を生かしたいと思う地域の方々がいる一方で、親は子供にふさわしい教育環境を考えたときに、少し規模の大きいところで子供を学ばせたい。ますます人口が減少してしまうというところに拍車が掛かるという現象も実は既に見られている状況なのですね。

北島委員　さらに小学校が無くなると、もちろん子育て世代、全部引き揚げますから、もっと。

染谷市長　学校が無くなると引き揚げるのではなくて、学校が無くなって、なおそこに居ついていただきたいということが目的ですから、スクールバスで学校に運ぶという形になると思うのですね。ですから、地域には若い人たちがより住みやすくなるということを私は逆に狙いたい。その地域に若い人たちに住んでいただいて、自然はたくさんありますし、地域が子供を見守る環境もあるし、子供を育てようという地域力もある。そういうところに住みながら、学校という教育環境については、スクールバ

スで少し大きな近くの拠点校に集めて教育をする。終わったら、またスクールバスで帰すと。その地域から若い人たちがいなくなるのではなくて、むしろ引っ越さなくても、ずっとそこに住んでいられる環境を作っていきたいというのが私の考え方です。

秋田委員　うちは来年度、中学校に上がるものですから、子供たちの興味・関心というのが、中学校に入ったら何部に入ろう、子供たちとの会話で聞かれるのですけれども、実は中学校では顧問の先生の数が足りなくて休部にしなければならない部活動が出てきていることも考えたときに、子供の選択肢を増やすという意味でも、今まで出ていたお話は小学校が主だったのですけれども、もう少し学校の規模というものを考えていったときに、子供にとっても環境的に選択肢の多い環境が作れるのであれば、ひとつの手段としてはいいのかなと思いました。

染谷市長　そうですね。

牧野委員　建築の設計業界には、クラウド的な考え方で、東京は今、オリンピックでいろいろな建物を急いで作らなければなりません。でも、設計士が足りないので、基本設計だけ東京でやって、実施設計は地方の設計士に、ＩＣＴではないですけども、データで送ってきます。それを島田市の近くで作って、それをまたデータで送り返しますので、仕事がどこにいてもできるという時代になりましたので、なお一層、今から山間地のすばらしい環境が価値付けられていく時代が来るのではないかと思っています。特に就業前の子供たちにとってすばらしい環境があり、我々ボーイスカウトの指導者の中で都会の人たちから、何でこんなにすばらしいところがあるのに、どこでもキャンプできるじゃん、いいところに住んでいるねと言われますけれども、本人たちは余り関心がない。

笹間の陶芸フェスティバルのときに、笹間の奥を見るバスツアーをやってくれまして、その一番奥でしたかね、外国人の方のお住まいになっていて、その方は全然生活に支障は無い。食べ物もあるし少し出たいといっても、藤枝からずっと回っていけば車で出られます。非常に便利なところですばらしいというお話をしていると聞きました。これからは、そういった夢を持っていける地域も私はいいかと。

濱田教育長　先ほど北島委員がおっしゃったことに少し反論したいと思うのですが、実は小学校、または中学校が無くなったら、そこが消滅する、文化が消えてしまうという考え方は、本当にその通りかなと思います。実際、笹間も統合したのだけれども、先ほど牧野委員からもお話があったように、国際陶芸フェスティバルを初め、さまざまな形で外部の人たちを呼び込む取り組みをしています。蛍を見る会にしましても、夜間といいながらもかなり大勢の方がお見えになっていましたし、さまざまな形で工夫をすれば、その地域というのは生き残っていくことができるのではないかと思います。ただ、それなりの努力をしなければならないと思うのですね。自分たちの体を使って、要するに汗をかかなければ、それは無理だと思います。人頼みで地域を守っていくということは、私は難しいとは思いますが、その気になれば、まさに地域の意思というか、決意が

あれば、僕は可能ではないかと思います。そのお手伝いは行政としてやっていかなければならないと思います。いろいろな形で、地区を残す、文化を残すということは、学校が無くても十分可能ではないかと私は思います。

染谷市長　そろそろ時間が迫ってきております。委員の皆様からいろいろ御意見をいただきました。ありがとうございます。

特に学校の配置、適正化については非常に難しい問題であります。しかしながら、取り組んでいかなければいけない大きな課題でもあります。さまざまな問題をクリアして進んでいかなければならないということは想像に難くありません。今後の進め方について、五條委員長から何かお考えがあればお聞かせ願えたらと思いますが、いかがでしょうか。

五條委員長　確かに市長のおっしゃる通り、非常に難しい問題を含んだものがあります。この提言書にありますように、手立てというか、「次の三つのプロセスを踏んで」というところで、まずは専門的なワーキンググループを立ち上げて、調査・研究を進めていくという、こういうことがよろしいかと思います。このためにも、市長にもぜひ協力をお願いしたいと思います。

染谷市長　ありがとうございます。今、五條委員長から、島田市立小学校及び中学校の在り方検討委員会のこの提言を踏まえて、教育における課題に対してワーキンググループを設置していくということを今回の教育会議の結論としていってはどうかという御提案をいただきました。

私としても、この在り方検討委員会の提言書をいただく、これで終わりではありませんので、これを生かして次にもう一歩進めていくためにどういった取り組みが必要なのかということについて、専門的なワーキンググループを設置することについては賛同しますので、今後、このワーキンググループの設置ということで進めてまいりたいと思います。

本日は長い時間、活発に御議論いただきまして、誠にありがとうございました。これにて、本日の総合教育会議を終了させていただきます。ありがとうございました。

閉　　会　　午後４時27分